

さとうまさる

佐藤 優 著「読書の技法」東洋経済新報社、2012 年 8 月 9 日刊を読む

高校レベルの基礎知識をつけるのが、最も確実に効率的な知の道

1. (1) 知識を着実に身につけ、人生を豊かにするためには、正しい道に沿って読書することが重要だ。
 - (2) 東京・日本橋から、京都に行くことを考える。ここで東海道を選んでも、中仙道を選んでも、京都・三条大橋に到着する。しかし、奥州街道、日光街道、甲州街道を選んでしまうと、京都に行き着くことはできない。読書もこれと同じである。
 - (3) まず正しい道、すなわちすでに確立されている伝統に則して本を読むことが重要だ。その意味で、読書術は基本的に保守的なのである。本書で、筆者が高校教科書レベルの基礎知識をつけておくことを強調しているのも、それが知の伝統を押さえるために最も確実に効率的だからだ。
 - (4) 「受験勉強が現実の社会生活に役に立たない」という認識は間違っている。社会人が大学受験のレベルで必要とされる知識を消化できていないため、記憶に定着していないことが問題なのであって、受験勉強の内容は、いずれも社会人になってからも役に立つものだ。
 - (5) それがなぜできないのだろうか。ここに方法の問題がある。
 - (6) 日本の受験勉強に関しては、学校に合格する、資格試験に合格するということが目的となってしまう。要するに合格という目的地を目指して「道に沿って」歩いていくので、この目的地に到達してしまうと、受験勉強で詰め込んだ知識を維持していこうという意欲が失われてしまうのである。
 - (7) もっとも、受験勉強で勉強した内容は、かなりの部分が記憶の蔵に蓄えられている。
 - (8) あのととき勉強した知識も、仕事や人生の役に立てるために再活用するという意欲を持ち、正しい方法論、すなわちより高度な専門知識を身につけるために高校レベルの基礎知識が不可欠であるとの認識を持って、再度、教科書と受験参考書をひもとけば、その知識は確実に生きた知に転化する。
2. (1) 正しい方法論を確立するために重要になるのは、時間という制約要因について、常に頭に入れておくことだ。
 - (2) たとえば、中学レベルの数学に欠損がある場合、それを埋め、さらに高校レベルの数学を消化して、金融工学の専門書を読むことができるようになるためには、数学の準備だけで最低 700 時間はかかるであろう。複数の外国語を習得した経験がない人が、ゼロからロシア語に取り組んだ場合、新聞を読む語学力をつけるのに 700 ～ 1000 時間がかかる。
 - (3) 数学や外国語の学習は、身体で覚えなくてはならない部分があるので、毎日 10 時間、集中的に学習するというような手法での学力向上には限界がある。毎日 2 時間の学習を 1 年から 1 年半続けるのは社会人にとって相当のコストだ。その時間、他の勉強や仕事に取り組むことによって期待される成果との機会費用について考える必要がある。
 - (4) 外国語がそれほど得意でないビジネスパーソンから「ロシアで仕事をすることになるので、

どうやってロシア語を勉強したらよいでしょうか」と尋ねられると、筆者は「200 時間くらい集中して、日本人の先生からロシア語文法をきちんと教わることと、1500 語くらいの日常生活に必要な単語を丸暗記することをおすすめします。その知識があれば、生活に困ることはありません。仕事で必要なロシア語についてはよい通訳を雇うことをおすすめします。機会費用を考えた場合、これからロシア語を勉強することはおすすめしません。それよりも高校レベルの英語を復習するほうが役に立ちます。ロシア人もビジネスに従事する人たちは英語を解します」と助言している。正しい方法論には、捨てる技法も含まれる。

P7 ~ 10

3. (1) 知は基本的に先人の遺産を継承したうえで成り立っている。このことを理解せずに高望みだけして、難しい本を力^{ちからわざ}業で読んでも、知識はまったく身につかない。読んだ本の知識を身につける土台として必要になるのが、本書で繰り返し指摘している基礎知識である。
- (2) よく本格的に読書を始めたビジネスパーソンから、次のような質問を受ける。
- 「本を読むときは、大事なところに線を引くかメモを残すようにしていますが、それでも内容が身につかないのですが…私は記憶力が悪いのでしょうか」
- (3) 人間の記憶や理解は不思議なメカニズムになっており、知識は一定の熟成期間を置いた後にしか身につかない。筆者の場合、現在読んでいる本の知識が本当の意味で身につくのは、3 ~ 6 カ月後である。したがって決して焦らず、本書で紹介した読書法を続けることをおすすめする。
- (4) なお、半年経ってまったく読書力が向上しない場合も、「自分は記憶力がよくない」などと諦める必要はない。おそらくそうした読者は、背伸びをしすぎているのだ。
- (5) たとえば高校段階での数学に不安があり、行列、数列、微分法、積分法がまったくできないのに、近代経済学や統計学の知識を身につけようとしても、無理である。その際は数学の基礎力をつけて再チャレンジするしか、知識を着実に身につける道はない。
- (6) そうやって基礎知識をつけたつもりでも読書力が向上しない場合、自分の基礎知識のどこに欠落があるのかをきちんと調べることだ。そのときに重要なのは、高校レベルの知識に関して自分にどのような欠損があるかを客観的に認識することだ。
- (7) 学校秀才型だったビジネスパーソンほど、自らに高校レベルでの学力の欠損があることを認めたがらない。優等生としての「プライドの檻」から抜け出すことができないため、高校レベルの数学や英語が消化できていないという疑念を持つことを心理的に回避する。恥ずかしいので、誰にも尋ねることができない。特に東大、京大、早大、慶大など、偏差値が高い大学の卒業生にその傾向が強い。
- (8) しかし、現在の教育制度では、国家公務員 I 種試験や司法試験の合格者でも、ほぼ例外なく学力の欠損がある。ここで特に重要なのが数学と英語だ。
- (9) 数学も英語も、基礎学力がついていないと、どれだけ努力を費やしても能力が向上しない。特に私大文科系の出身者の場合、数学については中学段階での知識の欠損がある場合も多い。中学、高校の数学については、教材も整っているし、最近では社会人向けの優れた教科書も刊行されている。半年から 1 年で欠損を埋めることができるので、その作業に着手することを強くすすめる。
- (10) 現実を虚心坦懐に認め、自らの欠損を早く埋めた者が最終的に得をする。

4. (1) それでは、自分自身の基礎学力の欠損をどのように診断したらよいのだろうか。
- (2) これが意外と難しい問題である。基礎学力に欠損があると感じた人で、「それでは高校 1 年生からの勉強をもう一度やり直そう」と考えて、教科書や学習参考書を揃えても、それをもう一度やり直すことは非効率的だ。まず重要なのは、理解できている部分とそうでない部分の仕分けである。
- (3) 筆者は読者に、大学入試センターの試験問題を活用することをすすめる。
- (4) この試験は、高校レベルの学力が習得できているかをチェックするために、実によく作られている。大学入試センターの試験問題をひとつおろし解いてみれば、どの辺に知識の欠落があるかがよくわかる。目安として、8 割を得点することができれば、当該科目の基礎知識が身についていると考えてよい。
- (5) まずは高校レベルの知識を基礎知識の基本と考えればよい。
- (6) このレベルの基礎力さえあれば、教養書はもとより、標準的な学術書ならば消化できるはずだ。

P112 ~ 115

5. (1) では、基礎知識の欠損部分を埋めるためには、どんな本を読めばいいのか。
- (2) 筆者は、高校レベルの教科書と学習参考書を活用することをすすめる。
- 日本の書籍市場では、ビジネス書と学習参考書の相互乗り入れが、ほとんどなされていない。また、大学以上の教育で用いられる書籍と、高校までの学習参考書についても、まったく別の扱いになっている。そのために学習参考書(特に大学受験を想定したもの)に蓄積されている優れた知的成果を社会人が用いることができなくなっている。これは大きな社会的損失だ。
- (3) 筆者が仕事場の本棚に置いて頻繁に参照しているのは、早稲田大学政治経済学術院の松本保美教授が編集した『シグマベスト理解しやすい政治・経済 改訂版』(文英堂)である。本書は、アカデミズムでさまざまな論争がある難しい問題を平易な用語で表現している。

P120 ~ 121

6. (1) なぜ、教科書だけではなく、学習参考書を活用するのかには理由がある。
- (2) 教科書はページ数と記載される事項が厳密に制限されているため、事項の羅列になっていて、読んでも意味がわからないことがある。教科書とは、教師がいる環境を想定しているので、説明不足が許されるのである。
- これに対して、学習参考書は、それだけを読んでわかるような自己完結した構成になっている。それに、市場原理の中で鍛えられているため、もっと端的に言えば、この参考書を使うことで大学入試に合格するという厳しい競争を経ているため、教科書よりもずっと内容が優れていることが多い。
- (3) 基礎知識をつけるという観点から見ると諸外国と比較して、日本の中等教育(中学校、高校)には根本的な欠陥がある。中学校の教科書がロシア、イギリスなどと比較してかなり易しいのに対して、高校の教科書が著しく難しいのである。
- (4) 筆者は大学の専門課程で理科系の課目について勉強したことがないので、文科系の内容についてしか正確なことを言えないが、高校の教科書に記載されている事項で、その内容を正確に理解するためには大学を飛び越えて大学院レベルの知識を必要とするものも多い。なかでも社会

科にその傾向が著しい。特に世界史はロシアならば4年かけて教える内容を1年で詰め込んでいる。この内容を高校生に理解しろというのが無理だと思う。

(5)裏返して言うならばビジネスパーソンが基礎知識を強化しようとする場合、高校の教科書と学習参考書を手引きにして、それに少し工夫を加えれば、短期間、具体的には半年から1年で、かなり高いレベルの知識と教養を身につけることができる。

(6)その具体的な技法について、「世界史」「日本史」「政治」「経済」「国語」「数学」と分野ごとに読者とともに考えてみたい。

P123 ~ 124

[コメント]

元外務省の外交官で作家の佐藤優(まさる)氏の「読書の技法」。学習の方法論。大学はもちろんのこと、社会でのすべての学習は高校の教科書と参考書から始まる。それ故、高校での学習の基礎となる小学校・中学校はもちろんのこと、高校での学習はていねいに行い、人生の基礎を自らの手で築くべきだと確信して疑わない私にとって、本書ほど役に立つ本はない。新年にあたり、ぜひご熟読を。

— 2014年1月1日 林 明夫記 —